

中学校の部



【一年生】

今是我慢のとき

大矢野中 一年 二宮 心音

新型コロナウイルスの影響で、三月から休校になった。長い休みで、友達とあまり話せなかったり、授業を受けられなかったり、いつまでこの状況が続くかという不安も当初はあった。しかし、私にとっては、家でできる遊びを考えることで、創作意欲が高まるという実感を味わったり、やったことのないことにも挑戦したりするという経験をすることができた。

まず、料理を一人で全部作ることだ。以前は火を使ってはいけなさと家族に言われていた。だから今回が初めての経験だった。実際に自分でやってみて、献立を考えたり材料を混ぜたりするのは、思っていたよりも大変だった。でも、自分なりに工夫をしながらやってみると意外にできて嬉しかった。また、洗濯物を取りこんでたみ、ダンスの中に入れた。量が多い日は、重い上に一枚一枚をたたむのも大変で、これからはもっと手伝いをしなければと思った。また、ほかの家の手伝いもいつもより少し多くやってみた。思っていたよりも大変で疲れた。でも、普段はこれ以上のことを家族にやってもらっているのだなと気づいた。

次に、水彩画に挑戦した。私は美術部に入学していて、絵を描くことは好きだが、実際に描き始めてみると全然うまく描けなかった。しかし、何度かやってみるうちに、少しずつ慣れ、最終的には思い通りの絵に近づいてきた。

このように、いろいろなことに挑戦してみるうちに、時間が過ぎていったが、家族から、「コロナウイルスの影響で、たくさんの方が亡くなっている。」と聞いたときは、もし、私の身近な家族や友達を失ったらどうしよう、いろいろなことを考えた。とにかく怖いと思った。家からあまり出てはいけないということで、ストレスがたまったりもした。でも、みんなも我慢しているのだから、私も我慢しなければならぬと、気持ちを引き締めた。

ただ、テレビのニュースに目を向けてみると、中には、「自分たちは大丈夫」と高をくくった人のコメントが流れることもあった。自由に行動したい気持ちはわかるが、もし自分がかかってしまったら・・・ということをも十分に考えて行動すべきではないか、いや、そうしてほしいと思った。確かに直接他の人に迷惑をかけているわけでもないだろうし、犯罪行為をしているわけではない。しかし、目に見えないからこそ、自分の正義で判断し、正しく行動しなければならぬと思う。今こそ、一人一人がみんなのことを考えて行動すべきだと思う。

今、ほとんどの人が自粛生活を送っている。家で料理を作ったり、体力作りをしたりと工夫している様子がテレビなどでも伝えられている。私も手伝いや自分の好きなことをやるチャンスととらえ、生活していきたい。最近、さらに感染者数が増加しているため、不安で心細い思いをしていて、気持ちが押しつぶされそうになることもあるかもしれない。でもだからこそ、今できることを少しずつしっかりやっつけていこうと思う。これまでの平穏な生活に戻すためにも運動・勉強・家の手伝いなど、私はまだ子供だけれど、自分にできることを少しずつでもいいから頑張っつけていきたいと思う。私

たち一年生は、昨年度、きちんとした卒業式ができなかった。だからこそ、今年は、やっぱりお世話になった三年生に感謝の気持ちを伝える卒業式ができるよう、今は我慢をしようと思う。

新型コロナウイルスについて考える

大矢野中 一年 辻本 新奈

昨年度末から発症が確認された「新型コロナウイルス」。入学式はあったものの、その後、「新型コロナウイルス」の影響で再び学校は休校になった。私にとつてもみんなにとつても、初めての経験だった。本来なら入学式の次の日から、中学校生活が始まって、クラスの友達とも少しずつ慣れていこうと思っていたのだが、休みが続いた。週に一〜二回の登校日。マスクをしていて顔がはっきり見えない上に、触れ合う時間も短くて、新しい友達もなかなかできなかった。

でも、私はこの自粛中だからこそできることを考えた。勉強や家事など、これまであまりできなかったことに挑戦してみた。

まず、勉強だ。全然分からなかったことを、姉に教えてもらいながら夜遅くまで頑張った。

次に、家事にも取り組んでみた。味そ汁を作り、家族がおいしいと言ってくれて嬉しくなったのを覚えている。同時に料理は、おなかを満たすだけでなく、人の心まで満たすのだなど実感した。洗濯物の取り込みや玄関の掃除、食器並べなどもやってみた。洗濯物の片付けは、何が何枚くらいあるかすぐ分かるように、また見た目にもきれいに並べることを目指した。父の服は、ひと回り大きいので

たたむのに苦戦したが、やってみると、思っていたよりも楽しかった。また、日頃これだけのことを家族にしてもらっていることに気づかされた。

コロナウイルスのせいでできなくなったことも多かったけれど、逆に楽しさや日頃のありがたさを知ることができた。

学校生活では、初めは友達ができず、学校が全く楽しくなかったけれど、やっと学校が再開してからは、友達もたくさんでき、いつの間にか学校が楽しくなってきた。気がついた。クラスのみんななども少しずつ仲良くなり、しゃべる機会も多くなってきた。そのため、楽しい毎日を送れている。ただ、まだ、完全に普通に戻ったわけではない。先生方も感染予防のための呼びかけや朝からの健康カードのチェック、アルコール消毒、また校内の消毒などを継続して行ってくださっている。私たちも朝の検温、こまめな手洗い、休み時間の換気、キープディスプレイスなどをやっている。このように、学校全体での予防に取り組んでいるお陰で、これまでよりも安全な生活ができている気がする。

私は、この新型コロナウイルスが広まる前までは、今までの生活が「当たり前」だと思っていた。でも、流行が広がるにつれ、今までの生活を送ることができなくなり、友達と自由に遊んだりすることもできなくなると、今までの生活は当たり前ではなかったのだと感じた。

現状は、コロナウイルスで「どこへも行けない」「いろんなことができない」けれど、日々コロナウイルスを収束させようと努力してくださっている医療関係など、自らが「感染」というリスクを背負いながら仕事をしてくださっている方々も多い。そんな方々に私

は感謝したい。また、この期間は、ある意味で自分を高める期間でもあると思う。規則正しい生活や自分の回りの整理整頓など、改めてしっかり見直せると思う。コロナウィルスの収束がいつになるかは分からないけれど、以前の生活に戻ってくる日まで、感謝の気持ちを忘れず、今は自分にできることをやっていきたい。

休校中に頑張ったことを通して見えてきたもの

大矢野中 一年 吉田 奈々美

私は、新型コロナウイルスによる休校中に勉強を頑張った。

一番頑張った教科は数学だ。特に、「正の数と負の数の加法、減法」だ。小学校とは違って、マイナスの計算も当たり前のように出てくることを初めて知った。交換法則や結合法則、自然数など知らない言葉やその意味など、覚えることがたくさんあり計算の順序も複雑で難しかった。そのため塾での問題も間違えることがあった。でもたくさん問題を解いていくうちに、正の数、負の数の計算に慣れて満点を取ることが二・三回あった。やっているうちにマイナスという符号が一つ増えるだけで、計算の世界が全く別のものに見えるようになった。これからもっとたくさんのお話を学んでいく。途中でできると分からないことも多くあると思うが、少しずつ理解して自分の数学の世界を広げたい。

次に頑張ったのは英語だ。英語では、英語のきまりを覚えたり、教科書に出てくる単語のつづりを練習したりした。文の書き方や文の構成など英語の勉強に必要な基本的なことを学んだ。単語は、AからZまでのアルファベットで始まる単語や、JanuaryやF

ebruaryなどの月の単語を練習した。特に月の単語のつづりを何回も書いて練習した。今では「月名」だけでなく、数学やスポーツ、教科の名前も書けるようになった。間違わずに書けるようになるまでもっと練習していきたい。書ける単語が増えると、読んだり会話をしたりするときに、使える単語が増えていく。使える単語が増えていくと、英語がもっと身近に感じられるようになるだろう。だからどんどん新しい単語に出会い、英語の知識を身に付けて、将来にも役立てたいと思う。

さらに社会では、日本地図を覚えたり、地球儀の仕組みを勉強したりした。日本地図は、今までのどの県がどこにあるか分からなかった。宿題のプリントや地図帳などを見て県の位置や所在地を覚えた。また、緯度や経度、本初子午線など、地球儀や地球のことを勉強した。授業を受けずに自主学習することはとても難しかった。日頃の授業では分からない部分を先生方に聞くと教えてくださるが、休校中はその機会がなく、全部自分で理解しなければならぬ。休校中の家庭学習をやってみて、先生方から勉強を教えてもらうことのありがたさを感じている。

新型コロナウイルスは、私たちの日常を奪った。学校に行くことや、友達と話すこと、休日に出かけることなど、今まで当たり前だと思っていたことができなくなった。家にこもっているとストレスもたまるので、友達と関わることも大切なことだと改めて気づいた。また、休校中は学習に力を入れてみたが、自分だけの力で勉強することが初めてだったため、自分がやっていることが正しいのかどうか不安もあった。また、私は長い時間集中することができないということもわかった。友達や先生方とコミュニケーションを取

ったり、勉強を教えてもらったりすることなどを考えても、学校の方が充実した生活を送れると実感している。

学校は再開したが、学習や行事、部活動など様々な制限がある。とにかく早く普段の生活に戻りたい。しかし今は、手洗い・うがい・換気・キープディスプレイスタンスなど新しい生活様式に沿って、できることを実行しながら、再びコロナウイルスの感染が拡大して学校が休校になるようなことがないように感染予防に努めたい。

新型コロナウイルスを通して

維和中 一年 山崎 歩大

僕はこの一年、新型コロナウイルスの流行を経験して、いろいろな感情でいっぱいになりました。まず、初めに感じたことは、「何なんだこのウイルス、すぐに終息するだろう、大したことなさそうだな」と他人事のように思い、気にせず過ごしていました。でも、そんな自分たちには関係ないだろうと思っていた新型のウイルスが日本に上陸し、すぐさま広まってしまいました。その時から他人事ではないと感じました。そして新型コロナウイルスに目を向けるようになっていきました。その頃から毎日、毎日、テレビでは新型コロナウイルスについて報道されるようになり、恐いウイルスだと感じていました。その後、緊急事態宣言が発令され、いよいよ僕たちの学校生活や私生活にも影響を及ぼし始めました。学校生活では様々な行事が中止、もしくは規模縮小となり、例年とは違う形で行われるようになりました。

僕たちはその年の三月、卒業を控えており、小学校最後の行事が

できなくなるかもしれないと聞きました。その話を聞いた時、僕たちは悔しさのあまり、泣いてしまいました。別の中学校に行く同級生もいて、最後のお別れの行事だけはしっかりしたいというのが、六年生みんなの思いでした。そんな僕たちのために先生方が動いてくださいました。まだ先が分からない休校期間に入る前の2月末、廊下での卒業式を計画してくださいました。在校生と廊下で向き合い、言葉を掛け合い、思い出深い一日となりました。しかしその後、諦めかけていた卒業式が規模縮小の形でできることを知りました。

僕たちの願いが叶ったことがとても嬉しかったです。嬉しくて、悲しくて、様々な感情で涙がたくさんこぼれ落ちました。人生で一度きりの小学校の卒業式、このような形でしたが、先生方のおかげで一生涯忘れられない思い出となりました。

また、私生活では、県外への移動ができなかったり、出かけるときにはマスクを着用して感染対策をしなければいけなかったりと、この新型コロナウイルスは私達の自由をたくさん奪っていきました。毎日たくさんの方の感染者・死亡者のニュースを聞く中で、ある日、父からこんな話を聞きました。

「いつかお父さんが買い物に行った時、ある二人の男性がマスクをしないで買い物をしてたんだよ。そして一人が『俺らマスクしないで大丈夫やろか』と言ったら、もう一人が『大丈夫大丈夫、俺らがせんでも周りがしとるけん大丈夫やろ。』と言ってたよ。」

このような父の話を聞いて、僕は、こんな人たちがいるからこのコロナウイルスはいつまでも終息しないのだろうなと感じました。

さらに、僕たちは人権学習で、「銀閣と又四郎」という学習をしました。この教材では、理解していないことで差別が生まれるとい

うことを学びました。そこで、僕は今流行っている新型コロナウイルスと重なり、新型コロナウイルスについて理解できないことで、今差別が起こっているのではないかと考えました。そんなときに、医療従事者への差別が起こっていると聞き、やはり、差別が起きてしまうんだなと思いました。どうして今、自分たちを守ろうとしてくれている人たちに差別するようなことがあるのか。そう考えると、悲しい気持ちになりました。僕は新型コロナウイルスが流行っている中、風邪をひいてしまい、病院へ行きました。するとそこでは、病院の中には入れず、先生方が出てきて診察してくださいました。僕はそこで改めて、医療従事者の方々の大変さや感染症拡大を防ぐために努力してくださっていることを感じました。

僕は、新型コロナウイルスを通して、様々なことを学び考えました。今、一番に感じていることは、このような病気がこの地球では発生してしまうんだなということです。僕たちはこのような病気に負けることなく、上手に付き合っていかなければならないと感じます。このようなウイルスで簡単に自由を奪われてしまうのは許せません。みんなこの新型コロナウイルスに対して負の感情でいっぱいかもしれないけれども、このような新型コロナウイルスが発生してしまった以上、コロナウイルスと共に生活していかなければなりません。これからも感染者が増え、大変なこと、辛いこともあるかもしれませんが、みんなで力を合わせてそれぞれが自分にできることを考え、昔のようないかな自由な生活を取り戻していきましょう。僕もこれからはしっかり自分ができることを考えて行動し、一秒でも早くこのウイルスが終息するように、感染症予防対策を徹底していきたいと考えていま

す。

コロナの影響で変わった生活

松島中 一年 福吉 真琴

テレビで、新型コロナウイルスのニュースが流れ出したのは、僕が小学校六年生の終わりのことだった。世界で何が起きているのか、不安だった。その頃、僕たちは、学校で卒業式や卒業プロジェクトの話し合いをしていた。しかし、二月末、政府の緊急事態宣言を受けて、三月から臨時休校になってしまった。卒業式が行われるの心配だったのを昨日のことに覚えている。そんな中、練習もできなくて、在校生もいなかったが、卒業式を無事行うことができたことは、嬉しいことだった。

四月に入って、中学校の入学式を迎えた。新しい生活をスタートしてすぐに、また臨時休校。臨時休校中は、家から一歩も出ず、学校から出された課題などをして家庭での時間を過ごした。登校日もあったが、マスク着用、検温、アルコール消毒と今までとは違うことが増えた。授業も、少人数で感染予防が徹底されていた。「ソーシャルディスタンス」を意識して、密閉・密室・密接を防ぐ決まりが学校生活の中でできた。最初の頃は、マスク着用も検温も正直面倒くさくて大変だなと思っていただけけれど、その生活が今では当たり前になってきた。

二期期になっても、新型コロナウイルスの猛威は消えず、感染予防を意識した生活が続いた。楽しみにしていた集団宿泊教室も、日帰りの集団活動教室になった。宿泊がないことは、残念だったけれど、

友達と一緒にいれることがとても楽しかった。中学校での体育大会も、同じように縮小され、練習期間も短く、午前中だけの開催になった。だけど、クラスみんなで協力して、思い出に残る体育大会にできたと思う。

正直なところ、コロナウイルスはインフルエンザのようにシーズンだけで、すぐに収まると思っていた。それが、一年経ってもまだまだコロナ禍が続いている。去年、臨時休校になった当初、僕は学校を休める、遊ぶ時間が増えたと単純に喜んでいたら、コロナ禍でどこにも行けない。コロナ禍でいろんな場所が使えない。友達と遊ぶことだって、気を遣う。それば、今の僕の世界の現実だ。

本音は、友達、親戚の人、じいちゃん、ばあちゃんと自由に会って、一緒に笑って過ごしたい。だけど、それができないことは、すごくストレスを感じることもあった。

それなら、僕たちはどうすればいいのか。それは、身の周りの人に感謝して、ちょっとした不自由を我慢し、自分にできる感染症予防をすることじゃないだろうか。医療従事者の人たち、家族、周りの大人の方々、僕たちの生活を支える仕事をして下さっている人たちに感謝すること。これが一番大切じゃないかと思う。コロナ禍は、いつ終息するか、まだ誰にもわからない。だったら、今自分が何をすればいいのか考えよう。三密を避けたり、ソーシャルディスタンスを心掛けたり、マスクの着用を徹底したり、不要の外出を避けたりとできることはたくさんある。これらのことを一人一人が徹底すれば、きっとコロナ禍の終息は、少しずつ近づいてくるはずだ。

いつ、誰が感染するかわからない。いつ、終息するかもわからない。でも、いつか気を遣うことなくみんなに会えて、また楽しく過

ごせる日々が帰ってくると思う。その日まで、自分にできることをやっていくのみだ。

コロナ禍が終息して、世界中の人たちが笑顔で暮らせる世界を、僕は待っている。

コロナ禍での学校生活

松島中 一年 久保田 健人

二月下旬、夕飯を食べている時、安倍前首相の記者会見で衝撃的な事実を知らされた。

「緊急事態宣言 臨時休校」

そこから臨時休校が始まった。家より学校の方が好きだった自分は、泣きたいような気持ちになった。それでも、登校日があったことが救いだった。卒業式も先生方のおかげで、行う事ができた。卒業式の後、久しぶりに会うクラスメイトみんなで遊んだりした。しかし、楽しかったのもつかの間で、臨時休校は幾度となく延長され、五月末までということが決定した、中学生という自覚がないまま、時間だけが過ぎていった。他の二校から進学してきた同級生とも話すことが出来ず、休校中なので友達とも遊べず、コロナなので行きたかった本屋にも行くことが出来なかった。とても暇で無駄な休みだった。

そして、六月、休校期間が明け、ようやく学校生活が始まった。見慣れない先生、同級生、初めての教科、仲良くなる期間が二ヶ月もなかった事になっているため、不安でいっぱいだった。学校が始まって数々の制約があった。朝、体温を測ったり、友達と話す際

も、「密」にならないように意識しないとイケなかったり、楽しんでいた給食も、会話をしないように食べないといけなくなった。行事では集団宿泊教室は集団活動教室になった。運動会も半日になるなど、楽しみにしていた思い出もなくなってしまったように感じた。

そういう事を乗り越えて、今がある。コロナが流行って良いことがあったかと聞かれると、答えはもちろん「ノー」である。良い事は何もないのに、軽率な行動をしまっている人がいる。東京では、新規感染者数は増加し続けているが、以前に比べるとそのことに驚かなくなっている。皆が鈍感になってしまっているのではないだろう。実際、熊本でも新規感染者は増加の一途をたどっている。ニュースではマスクの着用率も定着していると報道していた。

自分の行動が、多くの人に大きな影響を与えるかもしれないという気持ちを持って、多くの人に生活をしてもらいたいし、まずは自分自身がしっかりと自覚を持って行動をしたい。

差別のない世界へ

姫戸中 一年 藤川 栗名

二〇二〇年になって、しばらくたったころ、日本で「新型コロナウイルス感染症」が流行し始めました。そのことによって、感染した方が苦しんでいます。その方達は、症状だけでなく、いじめや差別にも悩まされていることをよく聞きます。

感染した方達は、発熱や頭痛、味覚嗅覚の異常などの症状やその他の症状に苦しむ方もいます。このような症状に苦しみながら、治療を受けて必死に病氣と闘い、回復した方もいらっしゃいますが、

亡くなられた方や後遺症に悩まされる方もいます。

このような方やその家族に悪口を言ったり無視をしたりする人がいることもよく聞きます。私は、苦しみに耐え続けた人へのいじめや差別がなくなっただけでほしいと思います。

きっと、感染した方は、私たちが思っている以上に辛い思いをされていると思います。そのような方にひどい言葉を言ったり差別をしたりするとさらに苦しまれると思います。逆に、優しい言葉をかけられるととてもうれしくなると思います。言葉は感染した方の心を深く傷つける刃物のようなものかもしれませんし、感染した方の生きる力になるかもしれません。だから、発言するときには言うべき言葉なのかを考えるといいと思います。

このようなことは、新型コロナウイルス感染症のこと以外でも同じようにするべきだと思います。他にも病気に苦しんでいる人がたくさんいます。生活に必要なお金がなくて困っている人や災害によって被害を受けた人などたくさん辛い思いをしている方がいます。

そのような人に、悪口を言ったり何もしないのではなく、優しい言葉をかけたり、何かできることをしたりするのが大切だと思います。私は、ひどい言葉を言われたとき、言い返してしまったことがあります。これからは、その人に言い返したりせず、酷い言葉を言うのをやめてもらうよう努力したいと思います。やめてほしいときは、それをきちんと行って、人を傷つけるような言葉を言う人を減らしたいです。そのためにも、まず私が悪口などを言わないように気をつけていきたいです。そして、悪口を言われたり、差別されたりして辛い思いをしている人がいたら助けたいと思います。

また、外国では、肌の色の違いによる人種差別で事件が起きまし

た。その事件を知って私は、肌の色が違うことによって差別をするのはおかしいと思いました。肌の色が違っても同じ人間であることに変わりはないし、何もおかしいことではありません。見た目で差別することは絶対にダメだと思います。

はやく新型コロナウイルス感染症がおさまり、色々な差別をなくして、世界中の人々が仲良く、平和に過ごせる日が来るといいと思います。

休校中の生活

姫戸中 一年 山中 陽向

ぼくは休校中ひまでした。友だちとも会えなくてお店にも行けませんでした。通常であれば中学校で入学式をして、平日に毎日学校に行ってみんなと遊んだり授業を受けたりしているはずでした。しかし、新型コロナウイルスのせいで休校になったからです。

ぼくの休校中の一日のくらしは、まず宿題をしました。その後はゲームやテレビを見ていました。それでもひまなので、漫画本も読みました。登校する日はありましたが、いつも通りの生活にはもどきませんでした。5月になると習っていた剣道も塾もできなくなりました。今まであたりまえと思っていたことがあたりまえではないと言うことに気がつきました。しばらくして、塾はテレビ電話を使ってすることができるようになりました。しかし、剣道はまだできませんでした。なぜかという剣道はどうしても接触があったり対面になったりするからです。家にいてばかりでは体力も落ちるのでフリスビーで人がいない場所で遊んだり、走ったりして、い

つ剣道が始まってもいいように体力をつけていました。

5月の後半ぐらいには剣道の練習が始まりました。しかし、筋トレや素振りばかりで面などの防具を使つての練習はできませんでした。それでも、友だちの顔を見たり話したりできて楽しかったです。筋トレのメニューは先生が考えたものできつかったです。しかし、「行きたくない」という気持ちにはなりません。高校生も帰ってきていたし、みんなと体を動かすことができたのですごくうれしかったです。

休校中は悪いことばかりではありませんでした。家族といふ時間も増えて、普段ではやらないようなこともできました。新しい趣味を発見できたり、飼っている犬ともいっぱい遊んだり休校前にはできなかったこともありました。休校がなかったら、あたりまえと思っていたことがあたりまえではないことに気づけなかったかもしれない。

今でも、新型コロナウイルスは終息していないから、また休校になるかもしれません。しかし、今度休校になると1年生で学ぶ内容が終わらなくなるかもしれないので、みんな対策をして、1日も早く終息することを願っています。

コロナ禍で学んだこと

龍ヶ岳中 一年 江口 結愛

私は、新型コロナウイルスによって気づいたことが二つあります。一つ目は、「当たり前前のことは当たり前ではない」ということです。私は中学校に入学してすぐに休校となり、友達と会えなくなり

ました。臨時休校中は、学校から配られたプリントを自分で教科書を見ながら解くことしかできませんでした。また、二週間という短い中学校での初めての夏休みは、友達と遊ぶことができず、自由を奪われた感じがして、とても残念でした。夏は暑かったのですが、感染予防のためにマスクをはめていました。冬はマスクをしていると温かいという発見がありました。私は最近マスクをしないと落ち着かなくなってきました。体育の授業中もマスクをはめて運動していません。給食も、準備中から話さず、黙々と給食を食べるだけで、さびしいし、あまり楽しくありません。一月に入り、全国的に新型コロナウイルスに感染する人が増え、天草や上天草でも感染者が出ています。私も身近に感じてきて、怖い気持ちが強いです。世界中でこんなにコロナが広まるとは思っていませんでした。このたった一つのウイルスにより世界中の人が毎日のように悲しみ、おびえ、苦しめられています。

二つ目は、「人は人で支えられている」ということです。医療関係者の方々は、私が思っている以上に大変だと思います。毎日亡くなる方がいる中で、「看護」という仕事を一生懸命されていらつしやる方は本当にすばらしいと思います。これからの未来が不安になる時もありますが、「人」を助けてくれる「人」がいるから、みんなで手を取り合い、助け合い、協力しながらコロナに立ち向かっていけるのだと思います。地域の方は私達が安全に登校できるよーうに見守ってくださいだったり、マスクが売り切れて困っていた時に、白い布のマスクを手作りして、届けてくださったりしました。本当に助けられました。でも、家にいる時間が長くなったおかげで家族との時間が増えました。姉とチーズケーキ、マドレーヌ、キッシュ

等、おかしやご飯を作りました。特にチーズケーキはチーズの味がしつかりとして、おいしかったです。兄弟と一緒に勉強したり、一緒に何かを作ったり、家事をしたりすることが増えました。家事を手伝うことで、母が楽になる時間が増えて、よかったですと思います。

最後に、今年の思い出と今後のことについて述べます。今年には体育大会と龍陣太鼓が特に思い出に残りました。体育大会では女子全員で踊るダンスを家で姉と練習し、それをビデオにとり、振りを一つずつ確認したおかげで、本番も失敗することなく、最後まで踊ることができました。違うチームの仲間から踊る前に、「一緒にがんばろう」と言われたことが心に残りました。今年は小中合同であったいた行事もできなくなりました。龍神太鼓の最後の授業の時に、龍ヶ岳小学校の六年生が来てくれました。久しぶりに会えて、総合の太鼓の時間の中で一番楽しい時間になりました。六年生は初めて太鼓をたたいて、緊張している様子でした。周りの仲間の太鼓の音をしっかりと聞いてたたくことを教えてあげました。今、学校に登校した時に友達の顔を見た時、友達と話をしている時、休み時間に男子が「ゲームしようぜ」や女子が「推し」の話をしている時が一番幸せだと思います。これから修学旅行などの楽しい行事をたくさんして、中学校を卒業したいと思います。少しでもマスクなしの生活を送りたいです。そのために私が今頑張っていることは不要不急の外出をひかえ、外から帰ってきたら、手洗い、うがい、消毒をすることです。また、今、目の前にある一つ一つの自分自身が出来ることを少しでも増やし、何にでもチャレンジしていきたいです。今までの当たり前前の生活が一日でも早く戻りますように…。

【二年生】

新型コロナウイルスから学んだこと

大矢野中 二年 川口 翔己

昨年末から新型コロナウイルスが世界中で大流行した。新型コロナウイルスのせいで、学校の行事もたくさんなくなった。また、たくさんの方も亡くなった。このことを通して、僕は学んだことがたくさんある。

まず、一番最初に学んだことは、油断禁物ということだ。僕は中国で新型コロナウイルスが流行しているとニュースで聞いても、あまり気にすることはなかった。なぜなら、他の国で流行してもさすがに日本まで来ることはないと思っていたからだ。しかし、これは大きな間違いだった。新型コロナウイルスが最初に確認された武漢から帰国してきた日本人から、他の人へ感染してしまったとニュースで聞いたとき、僕は焦った。このとき、僕はもっと早く僕を含め、日本人たちが感染対策をしていれば、感染の広がりを止めることができたのではないかと思った。日が経つにつれて、あつという間に東京を中心に日本全体に広がった。そして今、毎日「過去最高」を更新中だ。感染者は、毎日千人以上。今では、緊急事態宣言をした県も出ている。熊本県も、先日独自で、緊急事態宣言を出した。このようなことから「油断禁物」だということを改めて感じている。他人事ではなく、「自分ならどうするか。」という思いで考え行動しなければならぬと思う。

二つ目に学んだことは、差別をしたり偏見を持つたりしてはいけ

ないということだ。それは、これまで感染者がいなかった町に感染者が出ると、その人が周りの人から避けられたり、たくさんのおじめを受けたとか、職場を追われたなどの現実があると聞いたからだ。僕はあり得ないと思った。確かに感染した人に近づきたいとは思わない。同じように自分が感染してしまっても周囲の人はそう思うかも知れない。しかし、そのことで、本人が嫌な思いをしたり住んでいるところを追われたりするのはおかしい。感染したくて感染する人などいないだろう。僕は悲しくなった。ただこういう現実があったことを知って、もっと新型コロナウイルスが怖くなるとともに、差別や偏見は本当にあつてはいけないと感じた。

二学期の人権学習では、「水平社宣言」について学習した。そのことを通して、「いじめや差別は、『する側』の問題であり、互いを尊重し合うことでなくすことができる。」ということを学んだ。だから、予断と偏見で、コロナ感染者や医療従事者に冷たいまなざしを送ることはあつてはならないと思っている。

今、学校が再開し、みんなと会って、話したり遊んだり、勉強したりできる喜び。この当たり前のことがどんなに幸せなことなのかを改めて感じている。三月、新型コロナウイルス感染拡大防止のために中学校は休校になった。正直言って、最初はとても嬉しかった。だが、外出できない苦しみを毎日押しつけられて初めて学校に行きたいと思った。学校が再開されても、学校行事がなくなったり縮小されたりしていった。部活動の練習や試合も縮小されたり中止されたりした。それでも学校にいられることが嬉しい。そして、学校にいる時間をもっと大切にできるようになった。毎日のマスク生活や換気、手洗いうがい、三密をさけるなどの生活はとても嫌だ。し

かし、一人一人の心がけと行動で、新型コロナウイルスの感染者が一日でも早くこの世界からいなくなることを願っている。

できることからしっかりと

大矢野中 二年 上田 夢来

コロナウイルスで休校になって喜んだことを後悔する。感染を防ぐために外に出られず、夏休みが短縮され、学校行事までずいぶん少なくなってしまう。

でもこんなに時間があるときだからこそ、勉強や運動などで自分の力を伸ばして、友達に差を付けるチャンスだと思った。だから自分はず、運動する時間を増やすことにした。

また、勉強では、知り合いの方から問題集をいただき、頑張ろうと取り組んでみたけれど長続きせず、やはり地獄のようだった。運動も勉強も途中からは結局サボり気味になってしまった。

これではいけないと思い、今度は庭の草を切ったり畑を作ったりした。庭の草を切るときには、草刈り機を初めて使ってみた。初めは父から使い方を教わり、恐る恐る動かしてみた。思っていたよりもきつかったけれど、手に振動が伝わってくるのが意外とおもしろかった。草を刈った後の庭は、うるさい蛙の鳴き声も虫の音も聞こえなくなり、夜が少し静かになった。また、ブロックで周囲を囲い、中に土を入れて畑を作った。枝豆やキュウリ、トマトなど他にたくさん種類の野菜を植えた。今はどんどん成長してきて大きくなっている。実際に食べられるようになるよう、水や肥料やりを忘れな

いで続けていきたい。

休みの延長期間に入り、各教科から課題が出されることになった。その中に、国語の課題に「読書」があった。日頃はあまり読書をしていない僕だが、徐々に厚めの本を二冊読んだ。飽きたら読むのをやめて漫画でも読もうと思っていたのだが、途中からもっと先が知りたくなって、最後まで一気に読み通してしまった。最近、じっくりと本を読む機会がなかった。でも実際に読んでみると結構おもしろかった。だから、これから図書室や本屋さんでおもしろそうな本を見つけたら、目を通してみたいかなという気になった。

休校中は、本をたくさん読めたり、草刈りをしたり、畑を作ったりと、普段できないことができたりして、少しは成長できたかなと自分では思う。その意味で、休校は、僕にとって無駄にはならなかったと思う。しかし、コロナウイルスで仕事制限されている方や、患者の方々に直接関わっていらつしやる医療従事者の方々がたくさんいる。また、僕たちの生活にもたくさん制限がかかっている。誰もが安心して生活できる日常を取り戻すために、早く感染が治まってほしいと願う。

最近では、また感染する人が増加してきている。薬の開発が進んでいっているものの、第二波、第三波はとどまるところを知らない。やつとワクチンができて、外国での使用が始まっている。しかし、東京での感染者が急激に増加しているばかりでなく、日本全国、そして熊本県でも五十人を超える日が続いている。感染経路についても、夜の飲食店のみでなく、家庭内や院内感染の広がりがとても気になっている。ここで、しっかりと僕自身も気を引き締めないと、感染の確率が上がるのではないかと考える。

僕自身のことでは小さいかと考え、手洗い・うがい・

マスク着用など、できることをしつかりやっていきたい。完全に感染が収束したら、外に出られなかったことからのストレスを、釣りに行ったり学校の友達と思い切り話したりして、発散させたい。

コロナ差別と私のクラス

大矢野中 二年 林田 美月

今、世界中で新型コロナウイルスが流行しており、誰もが不安な日々を送っている。そんな中、「差別」というさらに不安を煽る言葉を耳にした。テレビでも多く見たり聞いたりするようになった。感染した人の住所をつきとめ、SNSで拡散したり、陰性になってやっと学校に行けるようになったのに、そのことでいじめを受けて不登校になったりしていた。また、デマの情報も流され、命を助けるために働いてくださっている病院の医師や看護師の方にまで、そんな「差別」は広まっていた。

私は、このようなニュースを見て、感染した人はもちろんのこと、命を助けるために闘っている医師や看護師にまで差別をしているのはおかしいと思った。昔から人が抱える差別の問題。その差別は全てが解消されることはなく、今でも人との間に根強く残っているものがある。世界の人々と協力し合って生きていかなければならない今でも、続いている差別がある。そんな現状だから、新型コロナウイルスだけでなく、その「差別」も終息しない。中学生の私でもわかる。今は差別をしている場合ではない。みんなと一緒に闘うときだ。

だから私は、コロナと差別の両方と向き合っていきたいと思って

いる。コロナに感染したからといって、その人を責めないで、相手を尊重しようと思える気持ちを広めていきたいと考えている。そのために、まずは、クラスのみんなと向き合いたい。私のクラスは、行事にとっても盛り上がり、みんなで挑戦するクラスだ。行事だけではなく、一つ一つの小さなことに対しても盛り上がるができる。一位を取ることが難しいときでも、盛り上がったクラス一位をめざしたり、応援で一位をめざしたりと、結果だけではなく、見えない努力をして、お互いに協力してきた。優しく、おもしろいなかまも多いと思う。しかし、悪いところも残念ながらある。落ち着きがなく、私語で先生に注意をされることも多い。授業は自分の将来のために集中して受けるべきであるのに、寝ていたりする人もいる。そして、お互いに注意をし合えばいいのに、クラスではお互いに注意できないということも、私のクラスの悪いところだと思う。

この状況を踏まえて、コロナの差別と自分のクラスを重ねて考えてみた。もし、私のクラスで新型コロナウイルスに感染した人が出たらどうなるだろう。いじる人やバカにする人。身体や心の状態を心配する人。様々な人がいると思う。感染した人を心配する人は多いと思うが、残念ながら、今の私のクラスでは感染した人を傷つけてしまう人もいると思う。私は、そうなる前に、一人ひとりがお互いを尊重していけるようにしたい。また、そうになったら注意できるようになりたいと思っているし、このクラスからそんな人を傷つけて何とも思わない人の考え方をなくしたいと思っている。

差別をなくすことは難しい。根強く残っていて、かつ、間違った情報が広まるのも、この時代は早い。でもそれを解決しなければ世界中の人々が笑顔にならないと思う。自分の言動に責任を持たず、

相手を傷つけてしまう言動は絶対になくさなければならぬ。だから、まずは自分から見直し、コロナと差別と闘い、勝って笑顔のある世界をみんなで作りたいと思う。私の生涯の目標は「差別」という言葉をなくすことだ。クラスのなかまと向き合い、今、この危機を乗り越えたいと思う。

新型コロナウイルスさんへ

維和中 二年 小林 夕風

こんにちは。新型コロナウイルスさん。急な話ですが、今から私があなたに伝えたいことを言います。

あなたは二〇一九年十二月八日に初めて人に感染したそうですね。私があなたを初めて知ったのは去年の二月頃でした。それから、三月二日からの長い休校が始まりました。四月から二年生になる私は、勉強に追いつけるかな？中体連大会はできるのかな？などたくさん不安がありました。そんな不安の中、登校日は唯一の楽しみでした。友達と会えることが嬉しかったからです。休校期間中は、外出もできない、友達と遊ぶこともできない中でとても暇だなと思っていました。そして「気をつけておけばいいや」や「どうせ自分は感染しないだろう」と軽い気持ちで捉えていました。そういう気持ちで毎日過ごしていると、日に日に感染者数が増えていき、ついに熊本で初の感染者が確認されたというニュースを見ました。それを知ったときは自分の周りに近づいてきていると感じ、とても怖かったです。自分や家族が感染しないように、家の玄関に消毒を置いておき、帰ってきたら消毒をしたり、家に帰ったら、手洗いがいを

したりすることをこれまで以上に心がけました。そして世の中はマスクをすることが当たり前になりました。

また、部活動にも支障が出ました。一番ショックだったことは、年に一度のとても大きな大会、中体連大会ができなくなったことです。私は三年生にとつての中学校最後の大会ができなかったことがとても悲しかったです。それまで毎日毎日、中体連を目標にきつい練習も皆で乗り越えてきました。そして、三年生にとつて一番の思い出に残る大会にしたいと心から思っていました。だからこそ、中止になったと聞いたとき、わたしはとても悔しかったです。チームの皆もうつむいた表情でした。けれど、代替試合があったので良かったです。

また、私たち二年生がとても楽しみにしていた修学旅行。行き先は毎年恒例の関西方面の予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大予防のために、行けなくなってしまうました。二年生で行う行事の中で私が一番楽しみにしていた行事でした。とても残念です。他にも、職場体験学習も一日になったり、運動会や文化祭も半日になったり、歓迎遠足が中止になったりと悔しい思いもたくさんありました。これまで当たり前でできていたことが、できなくなることが多くありました。今まで経験したことのない一年になりました。

でも、一つだけ、あなたに感謝することがあります。それは、ごく普通の当たり前の生活が、どれだけ特別なのかということに気付かせてくれたことです。学校行事では、中体連大会があることは当たり前、修学旅行があることは当たり前、学校に行けることは当たり前だと思っていました。さらには、マスクをしないで受ける授業は当たり前。買い物に行けることは当たり前。長期の休みの日に家

族で遠出する旅行は当たり前。毎週部活の試合をするのは当たり前。たくさんのお前さん・お前さん。でも当たり前ではなかったのですね。新型コロナウイルスが流行したことを通して、当たり前の日常がどれだけ有り難いことになりました。

この先、私たちがどうなるのか誰も分かりません。自分がコロナウイルスに感染してしまうかもしれない。身近な人がコロナウイルスに感染してしまうかもしれない。今、私にできることは、こまめに手洗いというをしたり、マスクをつけたり、授業中換気をしたり、不要不急の外出を控えたりすることです。そして、周りのみんなに声を掛け合うことです。みんなでも声を掛け合い対策を広めていくことで、感染を防げるかもしれません。自分にできることをしっかりとやっておくことで、何かしらの解決策につながるっていくかもしれません。いつかコロナウイルスが終息することを信じて、今ある日常を大切に過ごし、感謝して過ごしていきたいです。

新型コロナウイルスさん、私たちは対策をしっかりとっていくことで、あなたに打ち勝ちたいと思います。

当たり前前の未来へ

維和 中 二年 山下 湧心

僕は、新型コロナウイルス感染症により、多くの物を失いました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大で一斉休校などがあつたおかげで、当たり前前の生活が実は幸せだったことが改めて分かりました。コロナを初めて知ったのは二〇一九年の十二月頃でした。「中国で原因不明の肺炎の発生が複数報告されています。」とニュースで

流れました。僕はあのとき、「中国の話だから日本には関係無いだろう。」と思っていました。二〇二〇年でこれほどに感染拡大するとは思いませんでした。

年が明けた二〇二〇年一月十六日、国内で初の新型コロナウイルスの感染者が確認されたと発表がありました。僕は、「もう来てしまったか。」と思いました。その頃、中国当局は武漢市を「都市封鎖」しましたが、その前に約五〇〇万人がすでに帰省や旅行で武漢市を出ていたと武漢市長が明らかにしました。

一月下旬、日本にとって正念場となる出来事が起きます。感染症対策や隔離のやり方などが問題視されたダイヤモンド・プリンセス号の感染者増加についてです。僕は、「日本で感染者が初確認されたとき、政府が注意などしていれば、あのような感染者増加にはならなかったのではないか。」と思いました。しかし、今思うと、新型コロナウイルスに対しての情報や知識が少なく、対応が分からなかったのかなと思います。

その二ヶ月後の三月、学校は一斉休校になりました。僕たちは、しばらく学校に行かない退屈な日々が続きました。たくさんのお前さんが出て、それに追われる日々でもありました。ゲーム等がたくさんできると喜ぶ友達もいましたが、僕は、やはりみんなと勉強したり、運動したりする毎日が楽しいと感じていました。授業の内容も今年に全体的に遅れているので、僕は、クラスメイトと一緒に学んだり、遊んだりする時間や、来年に控えている受験までの勉強時間を失ったとも思いました。その時、改めて、みんなと学校で過ごす時間や勉強する場所があることは幸せなことなのだと感じるようになりました。だからこそ、この当たり前前の日々が早く戻るように感

感染症拡大防止の対策をしっかりと行っていきたいです。

そのようなコロナ禍の中、六月から中学校が本格的に再開しました。しかし、行事は延期や中止、あっても縮小といった形でした。そのような中でも僕たちのことを考えて、職場体験学習や小中合同運動会、校内マラソン大会などを短縮してでも企画し、開催していただいた先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。「ありがとうございます。」と何度も言いたいです。

今、僕の中学二年生が終わろうとしています。このような制限された一年はもう一生経験できないかもしれません。一つのウイルスに世界が恐れたことは、数百年に一度ほどの出来事かもしれないからです。しかし、その脅威により、大切なことに気付くことができました。「日々の当たり前」です。

僕たちは先の見えない道を進んでいるかもしれません。でも、絶対新型コロナウイルスの特効薬ができて、感染者が報告されない明るい未来がきっとあります。その日がくるまで、まず僕たちにできることは、こまめに消毒や、帰ったら手洗い、今は我慢して外を歩かない、三密を避けるなどの対策を徹底して行うことです。今こそ新型コロナウイルスに人間の本気を見せつけ、新型コロナウイルス患者0の未来を目指し、みんなで対策をしましょう。そして「日々の当たり前」が早く戻りますように・・・。

コロナ禍の中で

松島中 二年 池田 愛梨

去年の十二月、中国でコロナ感染者が確認されてから約一年。い

まだに終息せず、拡大が広がっています。今年二月頃から休校になり、私たちは、中学一年生をしっかりと終えることができませんでした。いきなり休校になり、一年生が途中で終わってしまったことに複雑な気持ちでした。

休校期間中は、それぞれの教科の先生から出された課題を一人で終わらせる時間がほとんどで、友達と会うことも話すこともできない状況が続きました。家での学習は、ゲームやスマートフォン、漫画、テレビなどの誘惑がたくさんあります。私は集中して課題を終わらせることができませんでした。他にも休校期間中に起きた問題もありました。ずっと家にいたせいで、生活リズムが乱れて、睡眠時間が長くなったり、逆に短くなったりしました。食事も昼は適当に取るなどしていました。コロナによる休校のせいで、今までの生活とはガラッと変わってしまいました。

六月になりやっと休校期間が終わりました。みんなと勉強することができるようになりました。しかし、学校が再開してもソーシャルディスタンスや消毒の徹底など、生活スタイルは変わりました。二年生の学習も一年生の終わっていない学習内容もありとても不安でした。そのような中で学校の再開でしたが、みんなと一緒に勉強できる日常にとっても充実感を持つことができました。

学校以外でも、コロナ感染症は様々な問題を引き起こしています。特に、コロナ感染者に対する差別や偏見、医療従事者への差別や偏見、さらには宅配業者の人にも偏見や差別の視点で接している人たちがいます。その人たちによる心ない言葉で傷ついている人たちがいます。少し考えれば分かることだと思いますが、コロナ感染症は私たちのその判断まで狂わせているように思います。今、この世の中

を支えてくださっている方々。私は、もつと周囲の人たちと一緒にこの人たちを称え、偏見や差別を無くしていきたいと思えます。

私たちの生活は変わりました。長期間の休校、中体連大会の中止、体育大会延期と短縮での実施、修学旅行の延期、その他にも様々な問題がありました。以前は許されていた行動も強く批判されるようになりました。コロナ感染症は私たちの楽しみ、目標を奪っていききました。でも、コロナに負けるわけにはいきません。私は自分自身の楽しみも見つけることができました。好きな歌を見つれたり、新しい趣味を見つれたり、家族との時間も増えました。生活が変わったからこそ見つかったものもあります。私は前向きに考えていきたいと思えます。

もし、コロナ感染症が終息したら、私は自分が我慢していたことをたくさん友達と楽しみたいと思います。映画を観たり、少し遠出をしたり、みんなで買い物をしたりしてみたいです。おもいっきり楽しみたいです。そのためにも、今はこの状況を乗り切るためにも、コロナ感染症に対する対策をしっかり行い、一日でも早く終息させるために私は生活していきたいと思えます。

コロナと向き合う

松島中 二年 山下 誓梨

令和2年、2月末から臨時休校が始まりました。学校から帰り、家で携帯電話を見てみると、「全校一斉休校」という通知を目にしました。テレビを付けると、ニュースで首相が発表しているところが生放送されており、そこで驚いたことは今でも覚えています。そ

の頃はあと少して1年生が終わる時期で、突然の休校は正直嬉しかったです。ですが、そう思えたのはほんの少しの間だけでした。

休校が少しずつ延長され、通常登校が始まった6月。朝の早い起床や支度、授業など、久しぶりで最初は慣れませんでした。慣れてきたと思ったら、次はコロナウイルス感染症対策で新たな生活様式になりました。全員マスク着用での登校、人と人との距離を遠くし、なるべく班活動や調理実習をしない、全学年集合はしない、等たくさん当たり前が当たり前じゃなくなりました。この生活が始まって約半年の今になっては、もうこれが当たり前前で、毎日全国各地で感染者が出てくるのも日常になりました。

自分はこの生活になれましたが、たくさん恐怖が潜んでいると感じています。私が一番怖いのは「差別」です。コロナに感染してしまった人は雇いたくなくて雇ったわけではありません。仕方のないことなのです。それでも絶えないコロナ差別には、私達一人一人が適切な行動を取ることが大切です。例えば、正しい情報を選択することや、周りに流されないこと、だめだと思ふことは自分からはつきり言う行動力を高めることを意識しながら生活していこうと思えます。

今のご時世、世のためにいつにも増して一生懸命働いてくださっている方々がいらっしやいます。最近では医療の緊急事態宣言が出されていますが、自分も感染するリスクはとても高いのに、必死になつて務めてくださっている医療関係のお仕事をされている方々に、改めて感謝したいと思います。

これから、いつ、どんなことになるのか分かりませんが、だれも予想することはできません。そんな今だからこそ、私は2つのこと

を頑張ります。一つ目は予防をしっかりと忘れずに行うことです。マスクの着用、消毒、手洗い、ソートンディスタンスなど、自分ができることを徹底します。二つ目は差別をしないことです。まずは正しい情報だけ選択し、判断します。そして、差別は絶対にしません。これからの世界が平和に過ごせることを願っています。

コロナ禍について

姫戸中 二年 碓 尊将

僕は、今、世界中でコロナ禍になっている状態について、世界中の一人ひとりが遠距離の移動や近い距離で大きな声での会話などの感染のリスクを高める行動を減らそうとする意識を持つ必要があると思います。感染して療養中にもかかわらず、病院を抜け出して買い物をした人もいました。このようなとても迷惑なことをしないようにする考えを持つ必要があります。

僕がそう思う理由は二つあります。

一つめは、自分が感染していた場合、周りの人が濃厚接触者と判断され検査を受けなければなりません、その人に陽性反応が出ればその人の濃厚接触者も検査を受けなければなりません、つまりたくさんの人に影響が出てしまうからです。

二つめは、感染者が増えていくと、今までできていたこと、会食、おでかけ、祭り、プールなど、たくさんすることができなくなり、暇な時間が増えて、楽しいことが減ってしまうからです。

楽しみがたくさんあることを優先し、感染者が増えていいのかというそれは違うと思います。迷惑をかけることにならない

と思うからです。

この新型コロナウイルスと人との戦いは長く続くと思います。コロナに効くワクチンができるまで、一人ひとりが感染対策をしっかり意識して行動すると感染拡大を防ぐことができると思います。それでも感染してしまった場合は周りに拡げないように意識することが大切だと思います。

もう二度と何ヶ月も休校となり夏休みが短くならないように一人ひとりの行動の一つ一つに責任を持ってほしいと思います。

短かった夏休み

姫戸中 二年 志水 冨

新型コロナウイルスがはやり、今年の夏休みは短くなり、時間があまりありませんでした。

夏休み前から、私は部活動のキャプテンとなり、覚えることが多くなり、自分の練習があまりできなくなりました。夏休みの部活動の一週を終えて、なんとなく流れを覚えることができ、自分の練習が少しずつできるようになってきました。しかし、まだ、キャプテンとして声が出ていなかったり、曖昧な指示をしてしまったりすることがあります。だから、これからもいろいろな工夫をして、みんなをまとめて、それに、自分の練習もたくさんできるようにキャプテンになれるように頑張りたいです。

勉強も頑張りました。数学や理科の宿題がたくさん残っていたので、それを一つ一つ理解しながら進めていきました。

家でしていたこととしては、夕ご飯の手伝いをしました。特に、

豚肉とタマネギの卵とじを作ったときは家族のみんなが「おいしい」と言ってくれて、とてもうれしかったです。

今年の夏休みは、海に行くことも多くなり、かえって日焼けをしてしまいました。でも、去年よりも、友達と遊ぶことが増えてとても楽しかったです。いい思い出になりました。

学校生活では、気が緩まないように感染防止に努めます。二年生として、一年生のお手本になり、三年生の背中を見ながら、残りの日々を頑張っていきたいです。

勉強では、三年生になると受験があるので、これから勉強することは忘れないように何度も復習して普段のテストでも良い点が取れるように頑張ります。

あいさつは、誰に対しても正しくいつでもみんなの気持ちがいいようなあいさつができるように頑張ります。下級生のお手本になれるようにしたいです。

この、学校生活、勉強、あいさつの三つの点を意識して自分の理想の三年生になれるように、これからも継続して、新型コロナウイルスにも負けないよう頑張っていきたいです。

【三年生】

感染症拡大で学び、気付いたこと

大矢野中 三年 益田 叡一

私は、新型コロナウイルスによって学んだことや気付いたことが四つあります。

一つ目は、社会的な協力の大切さについてです。感染が拡大し始めた頃、政府はこの感染症を抑えるために外出の自粛をするように呼びかけました。すると、そのときの状況をしっかりと理解した日本の国民の人たちは、外出を控え、外出をしないように呼びかけ合い、感染の進行速度を小さく抑えることに成功しました。しかし、今、この努力は水の泡になっていくことは明らかです。感染者は当初の頃とは比較にならないほど激増し、亡くなる方の数も日に日に増えているのが現状です。医療体制は逼迫し、医療崩壊を起こしていると考えられる人も多くとよく聞きます。これは、政府の政策の甘さもあるかもしれませんが、私は、一人ひとりの意識の甘さがこの結果を生んだと思います。我慢したら少しは良くなった、だからもういいだろう：こんな考えで旅行をしたり、大人数で夕食をしたりした人が多いのではないのでしょうか。このことから私は、集団の一員としてその集団に貢献し続けるという社会的な協力の大切さを感じ、自分も継続して意識していきたいと考えました。

二つ目は、見極める力についてです。感染症が世界に広まる前までは、人が多いところにも気にせず遊んだり話したりしていました。しかし、感染症が拡大し、感染者が増えたため、密集しないように

しようという意識、自分がどんな状態か見極め、判断して行動しようとする意識が普段からできるようになりました。こういった意識は、例年なら今の時期に多いインフルエンザなどの他の感染症の予防ができるということにも繋がります。状況を見極める力が自分や周囲の人を守ることに繋がるということに気付くことができました。三つ目はテレワークについてです。テレワークは、情報化が進む現代に合った仕事の仕方だと思います。社会全体がテレワークに切り替わることで、情報伝達のスピードが上がり、今まで移動や、待機に使っていた時間がなくなり、仕事が効率化されることに気付きました。これからは、5Gがどんどん普及していき、音声や動画などの遅れが改善され、こういった遅れによるストレスも解消されていくのではないのでしょうか。自分が実際に行うまではまだ時間があるとは思いますが、自分でも難なくできるよう、学んでいきたいと思っています。

四つ目は、生活についてです。感染症が広まる前まではよく外出し、運動も少しづつではありますが、行うことができていました。しかし、この外出自粛をきっかけに、不要不急の外出はかなり減ったと思います。外出することがなくなった分、運動もしなくなってしまうました。勉強ができる時間は増えましたが、自分の生活の過ごし方の変化は自分にとって大きなもので、より良く過ごすためには、と考える時間が増えたように思います。

私は、いつ、こういった感染症が出て、みんな協力してその感染症に対応したりすることが大切だと思います。また、そういったウイルスに感染することは、誰にでも起こり得ること、その考えをみんなが持っていれば、感染症での差別、偏見はだめだとみんな

が思うようになり、差別や偏見の減少に繋がることもあると気づきました。今後は、これまでの自分を振り返り、差別や偏見が減少するように身近なところから変えていきたいと考えます。

コロナ禍から学んだこと

大矢野中 三年 浦上 歩夢

二〇二〇年一月、僕たちが知らない間に、あるウイルスが中国で流行しました。それが、新型コロナウイルスです。僕がそのことを知ったのは一月の終わり頃だったと思います。中国で死者がたくさん出ていて、最初は「怖いなあ」と他人事のように、軽く捉えていた記憶があります。しかし、日本でも一人目の感染者が出て、二人目、三人目とどんどん増えていきました。国は感染拡大を抑えるために二月末に緊急事態宣言を出し、学校も休校になりました。初めは、「休みだ、嬉しい」と思っていました。しかし、日が過ぎるにつれ、感染者も増え、日本でも死者が出始めました。熱が出る、咳が出るという情報は以前から知っていましたが、あるとき、重症化している人は、高齢者や持病を持った人がなりやすいと聞きました。このときから、僕はコロナウイルスの怖さを強く感じるようになりました。なぜなら、僕も、時に入院をしなければならぬような持病を持っているからです。そのため、父や母は、よく「手洗いうがい、しっかりしてね」「マスクしっかりはめて、消毒もしてね」などと周囲の誰よりも予防の声かけを僕にしてくれ、心配もしてくれました。僕は、こういった家族の支えがあつて、みんなが側にいてくれるから今でも感染せずに生きていられると思います。そう思う

と、感謝の気持ちでいっぱいになります。

そして四月、休校が終わり、中学最後の年がスタートしました。しかし、そこには今までとは違った学校生活が待っていました。感染予防のため、登下校時もマスクの着用をするようになりました。給食では班を作らず、全員前を向いて食べたり、自分でセルフの形式で給食を準備するようになったりするなど、今までとは違うルールがたくさんできたように思います。しかし、約一週間後、熊本でも感染者が増え、再び休校になりました。このときはみんな、「えー、また休校かあ。学校のほうがいいよね」と言っている人がたくさんいました。一度、一ヶ月の自粛、休校を経験したからこそ出た言葉だと思います。しかし、今回の休校は前回よりも長い一ヶ月半の休校でした。この自粛期間中、東京では毎日のように過去最多人数を記録していました。熊本でも毎日、一人・二人と感染者が出ていました。五月いっぱい休校だったので、毎年五月に行われていた体育大会も延期になりました。今回の休校の影響で受験の範囲も、三年生の後半がなくなつたと聞いています。三年生という大事な年にこんなことに、と悔しく思います。また、特に、受験生をはじめとする学生は休校により勉強が進まなかったり、修学旅行も延期や行くことができてもうまく楽しめなかったりしたと思います。

この中で、僕が感じたのは、まず、親への感謝です。休校期間に家に居たからこそ、学校の楽しさに気付きました。だからこそ、その学校に行けているのは親のおかげだということにも気付くことができました。次に、自分の行動に責任を持つことの大切さです。自粛中、不必要な外出をして感染し、そこからまた感染する人が増えたことがありました。僕を支えてくれていた家族を守るためにも、

こういった行動は、自分は絶対にしたくないと考えています。自分の行動に責任を持ち、自分のために、家族のために、行動をしたいと考えています。

コロナウイルスについて

大矢野中 三年 坂田 崇光

僕は、現在流行しているコロナウイルスについて、正直、中学校生活最後の思い出をつくる年、そして、将来に繋がる大切な受験の年になぜ流行するんだという気持ちでいます。これまで頑張ってきた部活動最後の大会も中止になったものが多く、とても残念な気持ちでいるなかまが多くいると思います。僕たちは、コロナによって奪われたものがあまりに多い。このことに強い悔しさを感じます。

しかし、あるときニュースで、日本の若い世代の人たちがインタビューで「コロナ慣れしてきた」と答えているのを見ました。大勢の人が集まる場所に、平然とマスクなしで自分たちも集っていくその姿に、この人たちは何を考えて、何を言っているんだと思いました。自分の近くの、親しい人が苦しい思いをして初めて理解するのでは遅いのに、なぜ、とこのときも悔しく思いました。海外では徹底的に感染予防をしている国もあります。それなのに、今この日本では、「コロナ慣れ」と称されるように、自分がかからないと根拠のない油断をし、感染している人たちがいます。そんな油断しているときこそ危ないのに、いまだに甘い考えで外出して、クラスターなどが起こっているという現状もあるようです。もちろん、こういった人たち以外にも、自分なりに対策をしていたのかかったと

いう人もいますが、それでも、この現状はとても悲しく思います。

僕は、感染予防をするためには、一人一人の強い意識が必要だと思います。人々が協力して、お互いの距離を取り、三密を避けよう意識していない人が多いので、増加傾向が変わらないのではないのでしょうか。互いに距離を取る、大声を出さないなど、自分ができることを意識すれば簡単なことだと思います。僕自身は、予防のために、日々対策を行っています。例えば、学校から帰ったらマスクの外側を内側にして折って捨て、手を洗い、消毒をするようにしています。日々積み重ねていくことで、その習慣が身に付き、感染者の増加を食い止めていくことにも繋がると思います。

そして、コロナ差別というものをなくさなければならぬとも強く思います。もし友達や家族などの周りの人が感染した場合、自分はその人から少し距離をおこうと思ってしまうかもしれません。しかし、「それは違うよ」と注意してくれる人が自分の周りには今、たくさんいます。そんな家族や友達のように、正しくないことを正しくないと本人に伝えること。そして、そのおかしさをしっかりと理解し、その考え方や状況を変えていこうとしていけること。こういったことができる自分になっていきたいと考えています。

また、その他にも、コロナウイルスが流行し、気づいたことがいくつもあります。例えば、医療従事者の方々への感謝の思いや、当たり前は当たり前ではない、という気づきです。患者さんを病院の方々が一生懸命救おうとされている姿をニュースで見たり、友達と共に過ごせない日々を経験したりしたからこそ、気づいたことだと思います。悔しいことや、悲しいことも、もちろん数えきれないほどたくさんありましたが、きっと、この体験や気づきが自分にとつ

て意味あるものになる日がくるのだと思います。これからも自分は、今まで通り予防を行い、自分の周りでコロナウイルスを予防しようとし、人に、一緒に学び、一緒に変わっていくようにしていくなど、自分にできることから、一つずつできればと思っています。

孤独という辛さ

大矢野中 三年 千原 一斗

僕は、今回の新型コロナウイルスの発生により、多くのことを考えました。特に、医療の関係者やコロナウイルス感染者に対する差別やいじめについては、強い衝撃を受け、深く考えたように思いました。自分が思っていたよりも、酷く深刻で、強いかんじをかんじました。コロナウイルスと最前線で闘っている医師や看護師の方々が差別されることは絶対に間違っていると思います。自分の命が失われるかもしれないという危険な状況下でありながら、患者のために一生懸命働いている姿は、尊敬という言葉では足りないほどのものだと思います。医師や看護師の方々は様々な場面で酷い言葉を浴びせられながらも、患者のために働いてくださっています。それなのになぜ、差別をされないといけないのか。僕は、これは、人々の無知からくるものだと思います。知らないから怖い、だから差別をして、自分から遠ざけようとする。そして、このような差別や偏見は、コロナウイルスに対してではありません。

今、この社会には、多くの差別があると思います。人種差別や部落差別など、無くしたいと強く願われ、多くの人が闘いながらも、なお、多くの差別が存在している実情があります。コロナ禍で改め

て差別というものについて考えることのできるこんな今だからこそ、僕たちは人権について改めて見直すべきではないでしょうか。差別というものは、多くの人が差別をしているのに気付かずに、それを当たり前として認識しているときに起こるものだと思います。自分たちは正しい、間違っていないという考えが子どもにも、大人にもあるときに、その差別はなくなるならないと思います。だからこそ、その差別が存在しているとき、唯一気付いているのは、差別やいじめを受けている人だけだと思います。しかし、今、このコロナで差別をされている方々は違うと思います。相手が傷つくことを分かっているのに、差別や偏見が続いている。この状況は、やはりおかしいと思います。避けて当然だ、そんな考えが多くを占めていたら、そんな辛さを一人で抱え込んでしまうことになり、さらに苦しい思いをすることになってしまいます。そんな状況が続いて居しまうと、不登校や自死まで考えてしまう人もいるのではないかと思います。

今のこの社会には、辛い人に本当に寄り添える人が必要だと思います。辛いとき、話しかけてくれるなかま、苦しいとき、静かに寄り添える、そんななかまが必要だと思います。僕は、根拠のない噂を信じないことで、本人を間接的にでも傷つけないことになると思います。そうして、正しい判断が常にできる、そんな人に僕はなりたいと思います。辛いときに、しっかりと支えられる人になりたいです。人の気持ちを察して、寄り添っていられるなかまになりたいです。周囲の人々にも話をして、自分だけでなく、少しずつ差別をさせない雰囲気を作っていきたいと思います。コロナが収束しようとせずとも、しっかりとその関わる人たちを支える力を身につけていけます。

SNSを通して命について考える

維和中 三年 池田 翔太

僕は、初めて新型コロナウイルスが流行したとき「危険」という事を全く知らないで「大丈夫」だと思っていました。しかし、現実ではそう簡単に「大丈夫」とはなりませんでした。

三月～五月にかけて学校が休校になったり、志村けんさんなどの有名人が感染により亡くなられたりして僕の考えは「大丈夫」ではなく「危ない」へと変わっていききました。まさか、新型コロナウイルスで人が死に至り、世界の経済を揺るがし、自分の生活にまで大きく関わってくる事態になるとは想像もできませんでした。

現在、感染者の数が増え続けています。たくさん重症者も出ています。それなのに人々の考えは「大丈夫」へと戻っています。外を歩く人、会食をする人が減ることなく、それが感染拡大につながっていると聞きます。このような生活が続いてしまうと、たくさんクラスタが発生するかもしれません。

そのような中で、僕が一番考えさせられたことは、「SNSの使い方」についてです。緊急事態宣言が出て、お家時間が増えた時、SNSの使い方での誹謗中傷が増大しました。そのせいで、有名人が自殺を選ぶといったことも起こりました。このような自殺に僕は考えさせられることが多くありました。それはSNSの正しい使い方や危険性などです。言葉は時に刃物になってしまい、簡単に人を傷つけることができます。また、SNSは悪口を書いてよいところではなく、「書けてしまうところ」だということを残念ながら理解することができました。

たくさんの方がコロナウイルス感染や自殺などでこの世を去っ

て行きます。いつも声を聞いたり、動画やテレビで見ていた人が急にいなくなったりすると、とても寂しく悲しいです。自分が知っていたり、見ていたりした方が亡くなった時、いち視聴者として何か出来なかつたのか、という無力さを感じました。

僕は、自粛期間中にSNSを使っていて、人への誹謗中傷を見たことがあります。それを見て、僕は何も言うことができませんでした。そこで何か言えていたら、何か変わっていたのかなと思いました。言う勇氣を持ちたいと思いました。

また、自殺する人が増えてきたとき、僕は『三年A組—今から皆さんは、人質です—』というドラマを見直してみました。『三年A組』も、ネットでの誹謗中傷から命を落とした生徒がおり、そこで担任の先生がクラスの生徒にインターネットやSNSの危険性や正しい言葉の使い方を書いていくお話です。その話を見返すと、一人一人が気持ちを熱く語っていて、教師が警察沙汰にしてまで生徒達を正しい道へと進ませようする場面にグッとくるところがありました。誰かに従わされるのではなく、自分の過去から逃げずに向き合い、これから生きていくことが大切だと感じました。そして、勇氣を持って正しいことを言うことが大事だと思いました。

人という生き物は、簡単に人を傷つけることができます。自分は傷つけていないと思っても、相手がものすごく傷ついているかもしれません。傷ついた人は、「死にたい」という思いからではなく、「生きるのが疲れた」という考えになって自殺を選ぶのかもしれない。一人一人の無責任な発言や行動が、一人の命を奪ってしまうかもしれません。若くして命を落とすということは、未来をなくすということです。僕は、命を奪うような言動ではなく、一人で

も多くの命を守れるような言動を心がけて生きていきたいです。

このように、SNSを通して命について真剣に考えさせられた一年になりました。新型コロナウイルスの感染者が身近になると、誹謗中傷や風評被害が起こったりすると聞きます。僕は、そういった被害が0になるような世界になってほしいと願います。そして、僕も勇気を持って踏み出していきたいです。

今できることに思いを込めて

維和中 三年 中村 ありさ

新型コロナウイルスの影響で、制限の多い一年だったと思う。昨年度末、新型コロナウイルスの感染が拡大してくると、全国で緊急事態宣言が出され、私の通う維和中学校も休校になった。私が中学最後の一年を迎えてすぐのことである。

最初は熊本県内での感染者数は数人で、あまり実感もなく過ごしていた。しかし東京で感染者数が増え、県内でも増えてくると新型コロナウイルスの怖さをじわじわと実感することになる。五月、休校期間も延長され、外出自粛が続いた。私は元々家にいることが多かったのでストレスをあまり感じていなかったが、ニュースで長い自粛生活が続き、ストレスを感じている人が多いと聞き、たくさんの人々に影響が出ているなど感じた。

新型コロナウイルスが少し落ち着き、六月から学校が再開した。再開した学校では、暑い中マスク着用、手や机の消毒が徹底された。教室の換気が行われ、体育館でも密を避けるために広がって集まっていた。最初は慣れなくて、マスク着用も忘れることが多かったが、先

生方の言葉かけや、みんなの意識が高まり、少しずつ徹底していくことができた。

そのような制限の多い学校生活であったが、一番影響を受けたのは、学校行事だった。その中でも、小中合同運動会は、五月から九月に延期になり、また一日から午前中だけの短縮された運動会になった。また、郡市陸上大会は中止になり、郡市駅伝大会は実施方法が変わった。三年生にとってどれも最後の行事だったので、残念だった。

特に駅伝大会。私が中学校で一番力を入れて頑張ったことは駅伝大会だ。中学校一年生の最初は練習がきつくて先輩達についていくのが精一杯だった。ついていけなくなる時もあった。特に夏休みの暑い中での練習や放課後の練習はきつく、メニューもハードで諦めそうになるときもあった。でも、皆と声を掛け合って、協力し合いながら練習に取り組むことで、最後まで頑張ることができた。私は一年生、二年生と駅伝大会ではアンカーを務めさせていただいた。そして、中学最後の駅伝大会も、きついながらも頑張る覚悟でいた。そんな矢先に新型コロナウイルスでの休校、部活動も自主練に変わり、ほぼ走る時間が無くなってしまった。休校期間も長引き、その間に体力もどんどん落ちていった。私はこのままの状態、本番は走れるのだろうか、不安でいっぱいだった。

そのような中、陸上大会、駅伝大会に向けての練習が始まったが、今までのように走ることが出来なかった。陸上大会は中止となり、駅伝大会はいつものコースではなく、運動競技場を周回するかたちで開催された。今年もアンカーを務めることになった。新型コロナウイルスのおかげで練習に存分に取り組むことはできなかったが、

皆で協力し合い、今できることに全力で取り組むことができた。不安な日々もあったが、こうしてコロナ禍でも駅伝大会に向けて全力で取り組むことができ、思い出に残る大会となった。「今できることに思いを込めて。」校長先生の言葉が思い出された。

東京では再び感染者が増え、医療体制が逼迫し、県内でもさらに感染者が増えてきている。医療体制が逼迫すると、新たな感染者が出て治療できず、助かる命も助からなくなる。このような事態になる前に早めの政策が必要と感じた。

また、医療従事者や感染者への批判や誹謗中傷が起きている現実を知り、身近な人権問題について考えることもできた。特に医療従事者は危険と隣り合わせで日々戦っておられる。患者のために一生懸命に働いておられる。私たちはそのことを忘れず、感謝の気持ちを持ちたい。そして、感染者を増やさないように、自分にできる対策をしっかりとしなければと考えさせられる。

私は、今年受験である。緊急事態宣言が再び発令され、不安があった。しかし、このまま受験の日を迎えられそうである。「今できることに思いを込めて。」このようなコロナ禍でも受験ができること、勉強ができることに感謝し、しっかりと取り組みたい。そして、駅伝で培った最後まであきらめずに全力で頑張ることをモットーとし、中学生最後まで走り抜きたい。

新型コロナウイルス感染症について

湯島中 三年 古賀 紅葉

新型コロナウイルスと聞くと、誰もが警戒し、中には悲しみを抱

いたり、いかりを抱く人もいるだろう。そんな私たちの人生に大きく関係するようになってしまった新型コロナウイルスについて述べていこうと思う。

この新型コロナウイルス感染症によって変わったことはたくさんある。ここではそのうちの二つの例を挙げたいと思う。

一つは、ニュースについて聞く新しい言葉についてである。例えば「クラスター」や「パンデミック」、「三密」や「ウィズコロナ」「五つの小（こ）」など、新型コロナウイルス感染症に関する初めて聞くような単語がたくさん出てきたことだ。

もう一つは、私が住んでいる離島の湯島での変化についてである。最近、よく話題になっている「GO TO キャンペーン」というものを知っているだろうか。「GO TO キャンペーン」とは、主に旅行に出かけた先の宿泊代やお土産代を一部、もしくはそれ以上を払わずともサービスを受け、商品を買うことができる、いわゆる旅行など「ちょっととした息抜きをお得にできますよ」というような、自粛期間外出を我慢してきた私たちにはとてもありがたいキャンペーンだ。だが心配な点がある。湯島の場合、少子高齢化が著しく、お年寄りがとても多い地域であるため、もし「GO TO キャンペーン」で観光客が増え、島の誰かが感染してしまったら、最悪の場合、命を落とす人が出てきかねないという点だ。

このように、新型コロナウイルスによって、私たちの身近なところにも生活の変化が現れている。

次に、自粛期間中のことについて、変わった点とあまり変わっていない点について述べたい。

変わった点は、学校行事のことである。毎年楽しみにしていた島

民合同体育大会、修学旅行、職場体験、家庭科の保育実習、もちつきなど、三密になるのを防ぐため、中止または延期となった。やむを得なかったとはいえ、とても寂しかった。しかし、人と人の距離を一定に保ったり、マスク・うがい・手洗い・換気を徹底したりした上で学習発表会については実施できたので、よかったと思う。

変わらなかった点としては、湯島小中学校は少人数のため、十分な対策の上で休校していても学習をすることができ、休校が開けてからも普段とあまり変わることなく授業を進めることができたということだ。

ここまで私の身近なところの変化などを挙げてきたが、もっと視野を大きく広げて見てみると、たくさんの方の生活に変化が現れていることが分かる。

一つは、医療従事者のことである。私は新型コロナウイルス感染症に関する映像の中で、心に残るものが一つあった。それは、夏、暑い中感染症防止対策で着ておられた防護服姿だ。とても苦しうに汗を流しながら患者さんのシーツを替えているというものだった。医療従事者の方々の苦勞が改めてわかったと同時に、もっと感謝の気持ちを持たなければいけないと感じた。

もう一つは、「コロナ差別」というものだ。学校や仕事場で、帰省者、両親が医療従事者である、花粉症などの新型コロナウイルス感染症に似た症状の人などに対して、新型コロナウイルス感染症につながるような情報があると、避けたり噂したりといった差別が発生した。これを「コロナ差別」という。

このような差別が起きるには二つの理由があると思う。一つは、自分が新型コロナウイルスに感染したくないからである。これが一

番大きいと思う。誰にでもある「感染したくない」という恐怖心が原因だ。もう一つは、意識の違いだと思う。「〇〇さん、熱が出たらしい。」という不確かな話を聞いて、新型コロナウイルスに感染したと解釈して信じ込んでしまう。感染しないように気をつけることは大切なことだが、噂などの確かな情報かどうか分からないものを信じて行動するのは絶対にしてはいけないと思う。

新型コロナウイルスは、減ることはあっても無くなることはないと言われている。だからこそ、これからの生活で新型コロナウイルスと向き合い、正しい情報、適切な対応の仕方を身に付けていく必要がある。新型コロナウイルスの感染予防のための知識と、情報を見極める力を全員が持つべきである。

私は、自分の健康を保つために、これからも手洗い・うがい・マスクの徹底、アルコール消毒を心がけたい。また、正しい情報とそうでない情報を判断し、取捨選択する力を身に付けながら、毎日元気に過ごせるようにしたいと思う。

「コロナ差別」をなくすために

松島中 三年 岡部 心美

私は、これからの社会では、新型コロナウイルスを、インフルエンザウイルスと同じような価値観で見ていく必要があると思う。

令和二年始めから、日本でも新型コロナウイルス感染症が広まり、現在も感染者数が増加し続けている。マスクの常時着用やアルコール消毒の徹底など、一人一人が細かい対策をしても状況はなかなか良くはなっていない。そして、生活面や経済面など、いろいろ

な面で問題が生まれている。

中でも、最も深刻な問題が「コロナ差別」だ。ウイルスに感染した人だけでなく、その家族や友達までが対象となって差別を受けるということがあつていっていると聞く。人権を踏みにじる、絶対に許せない行為だ。それ以外にも、さまざまな事例がある。まず、学校などへのバッシングだ。最近、学校や老人ホームなどの公共施設でクラスターが相次いでいるが、私は、決して感染防止対策が不足していた結果ではないと思う。しかし、ネット上ではこれらの施設に対して「消えろ」「出て行け」など、目を覆いたくなるような言葉が浴びせられている。また、東京差別も同様である。東京都では、一日に数百人以上の感染者が出るのが当たり前になってきている。人口が多いので、感染者数が多くなるのは仕方のないことである。にも関わらず、「東京の人間は、〇〇県に入って来ないでほしい。」「実家に帰るな。」など、心ない声を発している人を、テレビを通じて目にした。感染の拡大を防ぐためにも、一人一人が行動を自粛する必要があるのは確かだが、それにしても言葉が過ぎていく。

一部の人を傷つけてまで発せられる正論は、本当に正義なのだろうか。私は、そうは思わない。みんなが苦しんでいるこんな状況だからこそ、私たちは、自分と同じように周りの人を大切にしながら、対策をする必要があるのだ。

コロナに対する不安や恐怖が、人々を差別へと導いている。私はこの状況がとても歯がゆい。だからこそ、もう一度主張したい。私たちは、新型コロナウイルスを、インフルエンザと同じように、「あたり前の目」で見る必要がある。インフルエンザとコロナウイルスは、全く違う感染症であり、感染した際の症状も異なる。私の

主張は間違っているのかもしれない。しかし、恐怖ばかりが人々の心を支配しているうちは、差別はなくなならない。世界中の人々が、恐怖の目だけではなく、あたり前の目で見ようとするのが、コロナ差別をこの世からなくす最善の方法ではないだろうか。

コロナウイルス生活の中で

松島中 三年 本瀬 真誌呂

新型コロナウイルスが流行してもう一年が過ぎようとしています。最初に休校となったときは、単純に学校が休めると喜んでいました。思ったよりも休校は長引き、やっと学校に通えるようになってもまた休校となりました。休みが増え続けてから、もうすぐ受験生なのにとだんだん不安になってきました。このときに初めてコロナウイルスがどんなに恐ろしいか気づきました。毎年行っている旅行も今年はコロナウイルスの影響でどこにも行けませんでした。久しぶりに友達と遊ぶ約束をしても、「コロナ禍だから」と言われ、遊びに行くこともできませんでした。このまま体育大会や文化祭などの三年生にとつて最後の学校行事もなくなってしまうのだろうと残念に思っていました。

しかし、そのような厳しい中でも学校の先生方は学校行事を中止せず開催してくれました。「コロナなのに？」と思う方もいるかもしれませんが、私はとても嬉しかったです。このような厳しい状況の中でも生徒のことを一生懸命考えてくれているということに改めて実感しました。体育大会では、テントの中にいる時はマスクを着用したり、文化祭では生徒の顔が見えるようにと透明マスクが配付

されたりしました。合唱コンクールも二度延期になりましたが、各学級に分け、ソーシャルディスタンスを保ちながら実施されました。先生方が色々なことを考えて学校行事を実施してくれたことで、厳しく限られた状況の中でも一生懸命楽しく参加することができました。

他にも、ボランティアの方々から一人あたり三枚のマスクを頂きました。今ではマスクも通常より高い値段で売られており、手に入りにくい時代です。そのような中で私達の為に作ってくださったことに本当に感謝しています。

今年は様々な場面で我慢することが多かった一年でした。しかし多くの人の支えがあつて学校行事なども無事にできたし、楽しむことができました。コロナウイルスが終息したら思いっきり外へ出かけ遊びたいと思いますが、それにはまだ時間がかかりそうです。今でも「コロナウイルス」という言葉を聞かない日はありません。最近ではコロナ以外にも新型のウイルスが出ていると聞きます。コロナ生活に慣れてしまっている今だからこそ一番危ない時期だと思います。慣れたからといって気を緩めずに手洗い・マスク・換気など当たり前のことを徹底して安全に生活できるようにします。一人一人の心がけで世界は大きく変わると思っています。みんなが安心して過ごせる未来を早く見たいです。

休校でがんばったこと

姫戸中 三年 花田 大樹

新型コロナウイルスがやはり休校が続きました。休校の間、時間

が沢山できました。まず、ウイルスなんかには負けず毎日走ることをがんばりました。朝か夕方のどちらかには家の近くを走っていました。部活動もあまりできなかったものでこれからも続けていきたいと思っています。

他にも勉強を沢山がんばりました。兄が受験生だったこともあり一緒に勉強していました。学校の課題の他にも、問題集で勉強しました。家での自分の仕事としては、毎日お風呂を掃除することを責任持って行いました。たまに、料理をすることもありました。特にカレーを作ったときは家族のみんながおいしいと言ってくれてとてもうれしかったです。

家にいることも多くなったので、外で遊ぶことも意識して行いました。小さな弟もいるので、家族みんなでたこ揚げをしたりしました。とても高く上がって弟も喜んでくれて楽しかったです。いい気分転換になりました。

三年生として、感染拡大防止に努めて、下級生のお手本になるような生活をし、受験に向けて継続して勉強をがんばっていきたくです。

新型コロナウイルスに負けない

姫戸中 三年 齋藤 涉

去年、姫戸中の「こころの講演会」に来ていただき、僕たちが修学旅行で行ったときには案内していただいたりと、とてもお世話になった薬師寺執事長の 大谷徹装さんから、メッセージが届いて紹介されました。それは次のような内容でした。

「感染症のなかったときと同じ生活にすぐには戻れない。そこで今回の変化を大規模なダイヤ改正として受け止める。ダイヤの改正があれば今までと同じ列車はもう来ないのだから、新ダイヤに即した生活リズムを身につけなければ、自分を苦しませるだけである。来ない列車を待つのではなく、目の前に来た列車に乗って前に進む。これが新しい生き方だと思います。」

僕はこの内容に触れて、新型コロナウイルスによってこれまでの生活が普通ではなくなっている今、どうすべきか考えるきっかけになりました。今までの生活にすぐ完全に戻ることはできないと思うので、世の中が変化していくのに対応していかなくてはいけません。

僕は、これから「前は良かったのに」ではなく、世の中の変化に対応しそれに慣れて、この生活が前の生活と変わらないくらいハッピーなものにしたいと思いました。

